## 土木の魅力探求「話す」「聞く」「考える」

# 棚田を生かす酒蔵（さかぐら）

本企画では、学生委員がチームを組み、それぞれの興味を持っていることを探究する。本連載は3部構成になっており、「話す」では、主担当が興味を持った理由や取材前の気持ちを率直に述べる。「聞く」では取材を通して疑問に思ったことを当事者に伺う。「考える」では取材後に学んだことを踏まえて感じたことをチームで共有する。今回は、地域の資産である棚田を取り巻く人々の活動に着目し、これからの農村景観の保全や活動について深堀する。

## 話す Discussion

**中野**――僕自身は、土木を学びながら景観の分野を専攻して、眺めることの豊かさや眺める対象を支えている人の力、地域の力については理解しているつもりです。しかし、都心の大学に通うだけでは知ることができない、農業の実情や現場の声を通じて、新たな気付きを得ることができるのではないかと考えています。そこで今回は、代表的な農村景観である棚田を取り上げ、地域を巻き込んで将来の棚田を作り上げていこうとする取り組みにスポットを当てたいと思います。皆さんは、どこに着目して話を聞きたいですか。

**松家**――私は、美しい棚田の景観がどのような人々の支えによって守られているのか聞きたいです。高齢化や担い手不足といった課題が深刻化する中で、日々どれほどの人が棚田に関わり、どのような体制で棚田の維持管理が行われているのか、普段は見えにくい部分にも目を向けたいと考えています。どのような主体が、どのような協力体制で役割を分担し、棚田を支えているのかについて知りたいです。

**村岡**――僕は、活動されている皆さんがどのような思いやモチベーションを持って活動されているのかを聞きたいです。日本の原風景ともいえる棚田の景観を守ることは大切だと感じる一方で、農家の担い手が減り、農地の保全が難しくなっている現状もあります。農地面積の減少が進む中で、単なる利益追求や生産性の向上を目的としない「棚田の景観を守る」という活動にはどのような価値や意義があるのかを知りたいです。また、地域の活動が、どのような経緯やきっかけで始まったのかについても聞きたいです。

**中野**――まさに二人が言ってくれたように、「誰がどのように棚田を支え、なぜ続けているのか」という点は、今回の取材の核心になると思います。棚田の美しい風景の背後にある人々の思いや仕組みを掘り下げたいと考えています。

**写真1**　取材に応じていただいた方々（久保田氏（中央）、岡崎氏（右から2人目））

# 聞く Interview

［取材協力者］
久保田 良和 氏
稲倉の棚田保全委員会 委員長
岡崎 謙一 氏
岡崎酒造 社長

「稲倉（いなぐら）の棚田」は長野県上田市に位置する。1999年に「日本の棚田百選」に、2022年に「つなぐ棚田遺産」に選定された。近年では、地域住民による保全活動と並行して、酒蔵や行政、地域おこし協力隊など多様な主体が協働しながら、新たな棚田の生かし方を模索している。今回は、地域の資産である棚田を保全しながら、新たな可能性を切り開こうとする二人に、現場の声を伺った。

**――自己紹介をお願いします。**

**久保田**――稲倉の棚田保全委員会の久保田です。私で4代目の委員長となります。私たちの委員会は、「眺めるだけじゃない、カカワレルタナダ」をスローガンに掲げ、地域の住民とともに棚田を活用するボランティア団体です。田植えや稲刈りの他、棚田のオーナー制度やイベントの運営を通じて、地域内外の人が棚田に関われる仕組みづくりを進めています。

**岡崎**――岡崎酒造の岡崎と申します。上田で360年以上続く小さな酒蔵を営んでいます。14年前に婿入りして蔵に入りました。当時は廃業寸前でしたが、品質の向上と地域との関わりを軸に再建を進めてきました。「おいしいお酒を造ること」は当然として、その先の〝まちづくり〟や〝棚田の保全〟といった活動にも力を入れています。

## 棚田と酒蔵との出会い

**――棚田の保全に酒蔵が関わるようになった経緯について聞かせてください。**

**久保田**――もともと稲倉の棚田は1999年に「日本の棚田百選」に選ばれ、地域の人の手で保全活動を始めました。しかし、活動の中心だった農家の高齢化が進み、次第に担い手が減っていきました。そんな折、岡崎さんご一家が棚田のコシヒカリオーナーになられたのが出会いのきっかけです。その後、酒米作りに挑戦する話が出て、私も「これを本気でやるなら5年間は続けよう」と腹をくくりました。2013年ごろから始まったこの「酒米オーナー制度」は、最初は20組でしたが、今では150組を超えるところまできています。私たちの予算の約3分の1を占めるほどになりました。

**岡崎**――私が酒蔵を継いだ当初、蔵はかなり厳しい状態でした。そこで「何をもって良い酒とするか」を改めて考え直したんです。今の日本酒は、どこも本当においしい。品質で差をつけるのは難しい時代になりました。だから、ナンバーワンではなくオンリーワンの酒蔵を目指すことが大事だと考えました。味だけでなく「どんな土地で、どんな思いで造っているか」という背景そのものに価値を見いだそうということです。そこで、家族で棚田のオーナーになり、久保田さんとも出会い、本格的に酒蔵と棚田との関わりが動き出しました。

## 保全だけではない、棚田を活用する酒蔵の取り組み

**――民間の酒蔵としてはどのように棚田の保全に関わるのでしょうか。**

**岡崎**――棚田との関わりは今から12年ほど前に始まりました。棚田で酒米を育てるだけではなく、棚田の風景そのものを価値に変える取り組みを進めています。稲倉の棚田の魅力の一つは、眺めの良さです。この美しい景観を生かせないかと考えて2024年から始めたのが「棚田モーニング」です。早朝の一番美しい時間帯に、棚田を見下ろす場所で地元食材を使った朝食を楽しむという取り組みで、1万5000円のプランにもかかわらず100組の予約枠がすぐに埋まりました。他にも、観光の専門家を巻き込んだり、教育や研修などを通じた体験の場として整備したりするなど、地域の外部の人が関わる幅を持てるような仕組みを整えました。

次のステップとして、現在は眺めの良い耕作放棄地を開墾し、一棟貸しの宿泊施設とショップなどを備えた新しい拠点づくりを進めています。これらの事業の目的は、棚田を保全するだけではなく持続的な活用へつなげることです。棚田を守り、未来へつなげるためには、安定した財源の確保が欠かせません。

保全委員会は非営利組織なので、資金を生み出す仕組みを自前で持ち

写真2　上田市街の北国街道沿いに位置する岡崎酒造

にくい。だからこそ、私たちのような民間が関わることで、お金と人の流れを棚田に戻すことが大事だと思っています。地元だけでは維持しきれない部分を、外からの関係人口や企業の協賛によって支える。その仕組みを作ることがわれわれ酒蔵の役割でもあると考えています。

**――上田のまちづくりにも関わられていると伺いました。**

**岡崎**――はい。蔵のある柳町は、かつて空き家が並ぶ通りでしたが、少しずつリノベーションを進め、今では味噌屋、パン屋、ワイナリー、そば屋などが並ぶ発酵のまちとして知られるようになりました。私自身も「発酵まつり」「朝カフェ」や社会実験としての歩行者天国などを企画して、まち全体をゆるやかに変えてきました。空き家を活用した公園づくりや新しい建物の誘致など、地域の人たちと一緒に小さな変化を積み重ねることを意識しています。

## 棚田を守る現場のリアルと本音

**――実際に棚田での農作業となると苦労も多いのではないでしょうか。**

**久保田**――棚田での農業はスポーツです。耕作放棄地が増え、機械も入らない。効率でいえば平地には到底かないません。非効率で、体もきつい。それでも、農業をやめてしまえば風景も地域の誇りも失われてしまう。だから私たちは、年に2回、棚田に関わりたい住民や学生を募って説明会を開いています。いつも「棚田なんてやらないほうがいいですよ」と正直に話しますが、それでも残ってくれる人がいる。そうした思いの積み重ねが、保全を支えているんです。

**――具体的に保全委員会の組織体制を聞かせてください。**

**久保田**――稲倉の棚田保全委員会は、上田市の「豊殿（ほうでん）まちづくり協議会」から派生した団体で、地域の振興部会から独立する形で2003年に設立されました。「棚田は地域の財産だから、地域で守ろう」という思いが出発点です。私はもう77歳になりますが、子どものころは学校から帰れば農作業の手伝いをするのが当たり前でした。けれども、農業というのは「嫌だ、疲れる」と思っていた世代なんです。機械も入りづらい棚田なんて、誰もやりたがらない。でも、棚田が荒れれば、下流にある集落にも影響が出てしまう。そこで、地域の人だけでは担い切れない部分を、外部の企業と協働する「棚田パートナーシップ協定」によって双方に利益が生じるようなwin-winの関係を意識しています。

**――民間の立場で棚田に関わる岡崎さんはどのように考えていますか。**

**岡崎**――棚田への関わり方にはいろいろな形があっていいと思います。一緒に田植えをする人もいれば、年に一度お酒を買って応援してくれる人もいる。それぞれの関わり方の〝グラデーション〟が全部正解なのです。棚田を守るために、全員が移住したり、毎週通ったりする必要はない。自分のペースで関われる仕組みが大事だと思います。

## 行政も民間も地域を巻き込んで、つなぐ明日の棚田

**――行政や地域おこし協力隊などとの連携はどのように行われているのでしょうか。**

**久保田**――今は、市や県の助成制度や地域おこし協力隊の力も借りながら、棚田の新しい活用に向けた準備を進めています。現在計画していることは、耕作放棄地を再生し、宿泊施設やショップを備えた拠点づくりです。観光や教育の要素を取り込みつつ、地域で利益を得て、さらに循環するモデルを目指しています。

**岡崎**――県や農水省の助成金を使うとなると、それだけつくらなければいけない資料も増えますが、行政を巻き込めるというメリットもあります。仮に資金集めをクラウドファンディングで集めてしまったら、事業は進むかもしれないけれど、一緒に動いてくれる主体も減って盛り上がりに欠けてしまうかもしれない。だからこそ、このような新しい試みが

動き出しやすい雰囲気を、保全委員会や行政がつくってくださることは民間としてはありがたいと感じています。公共と民間がハイブリッドで取り組む際の橋渡しをする役割として、酒蔵のような地域事業者が関わることに意義があると思います。

**――最後に、これからの棚田に向けた一言をお願いします。**

**久保田**――棚田の保全に〝正解〟はありません。それぞれの土地には、それぞれの事情があります。だからこそ、地域の人、企業、行政、みんなが自分の立場でできることを少しずつ積み上げていく。それが結果的に、棚田を未来へつなぐ力になるのだと思います。

**岡崎**――正直、棚田は大変なことばかりです。農業は天候に左右され、リスクも多い。それでも、自分が信じられる人たちと一緒に動き、棚田が少しでも盛り上がるなら、どんな挑戦もしていきたい。大きなビジョンを描くよりも、「まずはやってみる」ことを大事にしたいですね。

（2025年10月21日（火）・まちなかキャンパスうえだにて）

（聞き手：中野、村岡、松家）

## 考える Analysis

**中野**――上田という土地固有の持つ人と人とのネットワークや変化を受け入れる雰囲気が、稲倉の棚田を健全に保っていくことにつながっているのだと感じました。また、棚田に関わる人を巻き込み、それぞれの得意なことを引き出しながら、組織を動かしていく仕組みが整っていることが稲倉の棚田の強みだなと思いました。

**村岡**――草刈りの機械が使えないほどの急斜面を現地で見て、人力で行う農業の地道な努力と苦労を感じました。棚田の景観は、お金だけでは守れず、最終的には人々の思いと人手によって支えられていました。誰もが人ごとにせず、少しでも関心を持ち、参加し、「関わって」いくことが大切だと感じました。

**松家**――私も棚田を支えているのは「人の力」だと改めて感じました。多様な関わり方を受け入れる土壌を大切にされているからこそ、それぞれの「思い」が積み重なり、棚田が未来へと受け継がれていくのだと実感しました。これから美しい景観を前にしたとき、背景にある人の営みにも目を向けていきたいと思いました。

**中野**――棚田との関わり方も多様で、実際の農作業に取り組む人もいれば、日本酒を楽しむだけの人もいる。眺めて美しいと思うだけだった棚田が、その裏側ではたくさんの人の力で支えられているという想像力をもって眺めるようになると、また違った見え方がしてきますね。

（学生編集委員：中野太雄、村岡泰輝、松家茉莉子）

COLUMN

## カカワレルタナダ

稲倉の棚田では、「日本の棚田百選」に認定されて以降、さまざまな活動が行われ、保全体制が築かれてきた。中でも特徴的なのが、「棚田オーナー制度（カカワリ隊）」だ。年会費を払い、棚田での農作業を体験することで、収穫したお米や日本酒などの特典を受け取れる。また、棚田の景観を生かした「棚田モーニング」や「棚田キャンプ」「ししおどし祭り」など、多彩なイベントも開催されている。行政と民間が連携したハイブリッドな保全体制も特徴的だ**（図1）**。保全委員会は、地元のまちづくり協議会や地元の大学と連携して積極的に関与しながら、七つの企業と「棚田パートナーシップ協定」を結んでいる。棚田で作った酒米は岡崎酒造が購入し、保全活動の資金源となっている。日本酒「信州亀齢」のブランド価値とともに、棚田の知名度も高まり、win-winの関係が築かれている。

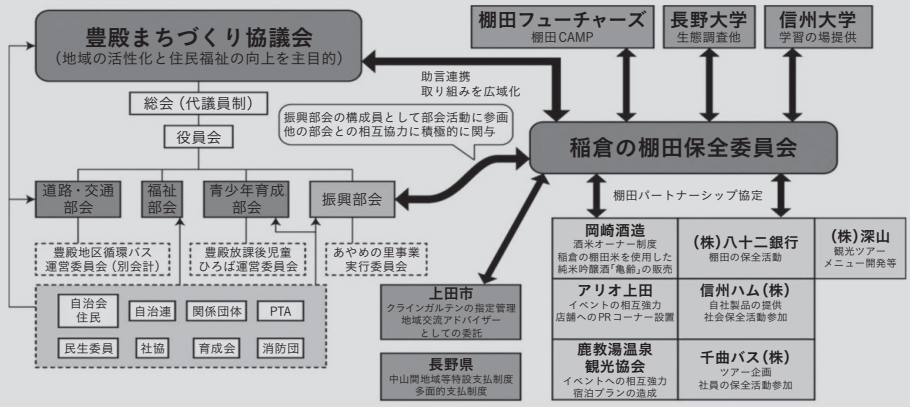


**図1　豊殿地域むらづくり他組織との連帯体制**
（提供：久保田氏）

農業資産「稲倉の棚田」を地域の核に多面的に活用。
都市住民交流の場としている